

---

Lyrical world    ~ 海のさざめく街に迷う ~

sam

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Lyrical world ～海のさざめく街に迷って～

### 【Nコード】

N0738Z

### 【作者名】

sam

### 【あらすじ】

ある冬の日、高校生の少年（主人公）はいつも通りの日々を送っていた。普通に学校に行って、友達と談笑して、そしていつも通り、変わりのまったく無い現実になんかだけガツカリして。

その帰り道、常々利用しているバスに乗り込んで、家への帰路を辿っていると、うっかり寝過ごしてしまい、《終点》まで運ばれてしまう。見慣れない海岸線。広い浅橋。脇目も振らず思い切り衝突してきた一人の少女。

反動でぶちまけられた少女の荷物には名前が書き込まれていた。

そこには確かに、「高町なのは」と。

一体ここはどこなのか、何が起きているのか、自分がすべきことは何なのか。

迷いながら、それでも少年は、選り、進んで、『進めて』いくしかない。

転生？ 幻想入り？ 異世界トリップ？ いいえ、これは《迷子》です。巻き込まれただけなんです……！

今のところは毎週日曜更新、詰まってきたら随時更新。

## はじまりの望み（前書き）

生まれてこの方、僕は迷子になりやすい体質を持っている。

この、生き物としての生に於いて最も不必要だと言いつける僕の天性の素質は、これまでの十六年間の人生に渡って度々僕を苦しめてきた。通い慣れたはずの通学路もふとしたきっかけで知らない路地に迷い込むし、近所のスーパーでのおつかいも品物を探している最中でスタッフオンリーの場所まで行っちゃうし、酷いときには自分の家のはずなのにここがどこだか一瞬分からなくなる。公共の場で立ち入り禁止区域にうっかり足を踏み入れそうになることもしばしばだ。

おかげで迷っている内に時間が過ぎ去って遅刻はするし信用は落ちるしで、僕の人生は他でもない僕自身に壊され、スタボロにされ続けてきた。

正直、疲れていた。

そんな訳で、僕の元々の性格と性質も手伝って友達も多いほうではなく、僕は休日をもっぱら家に籠もってアニメを見るような少年だった。ジャンルは主に美少女系。シリアスでもコメディでも面白くて可愛ければオツケー。後半部分は言ってしまうと家族にも煙たがられる。まあ当然といえば当然だが、しかしよく考えてみてくれ、

僕がこんな趣味を持ったということは両親のどちらかも同じような趣味を持っているということなんだぞ、血筋によるどうしようもない宿命なんだぞ……！

ともあれ、外の喧騒を離れ、若隠居<sup>わか隠居</sup>じみた時間の中で見るアニメというのは、とてもエキサイティングだった。

かわいい声で飛んだり跳ねたりする女の子達は、僕の心に潤いを与えた。特に魔法を主題とするシリーズには胸を打たれたものだ。可愛いだけではなく、胸の内に様々な決意と想いを秘め、我が道の妨げとなる障害を撃ち抜いていく、設定上の年齢からしてもかなり無理あるんじゃないやねでも可愛いからいいよ、と多くの人々を魅了した日本の誇るタイトルだった。

ゆえに、僕がその世界に憧れたのも無理はないだろう。年齢的にもそういう時期なんだと周りの人間も納得してくれるはず。実際、成長の過程で僕はそれが叶わないことをよく理解していた。時にかなり悶絶して枕を濡らしたほどだが。

そう、それが叶わない望みであることはもちろん解かっていた。所詮は三次元の人間がつくった創作物、行けようはずも無いことは明白なのだ。そんな事を考えている時点で既に<sup>すで</sup>にある種の病気なのだ。

だけど、だからこそ。

僕は、《あの世界》に憧れていた。

## はじまりの望み

その日は、実に普通の日だった。

いつも通りに退屈な授業を右から左へ受け流し、日常生活にはおよそ必要な情報に詳しい友人の言葉はキツチリ脳内にメモし、持参した新発売のゲームソフトでモンスターを狩りに行ったりと、本当に、何ら変なところも無い高校一年生の男子たる生活を送っていた。最近の高校生なんてこんなものである。

今の生活が楽しいか、と問われれば、僕は「それなりに」と答える。不満も何も無い、一介の男子高校生としては妥当な生活を、僕は気に入っていた。

贅沢を言わせて貰えば、この辺りでかわいい美少女と曲がり角でぶつかつて的なお約束なフラグ立たないかなあ……が正直な感想だが、叶わない夢は見るものではないことは熟知している。

6

「……ほう、然るに、お前は現在の現実に欲求不満っつーわけか」

そんな僕の心の吐露を聞いた数少ない我が友人・町田雄<sup>まちだゆう</sup>は、開口一番で僕の正直な感想を射た。さすがに長年の付き合いがあるだけあって、あまり要らない以心伝心があるようだ。

「まあ、正直言つて。つつても、ミニスカの魔法少女が箒で空飛ん

でたらなあ、みたいなレベルだよ」

「俺から見ればお前充分毒されてきてるぞ」

「もつと凄い人は現実すら見えてないから、僕なんかまだまださ」

「まさかその境地に至ろうってんじゃねえだろうな」

ちなみに、雄は僕とは正反対の人間で、暇あれば外でランニング、悪天候であれば室内で黙々と筋トレが趣味という根っからのスポーツマンである。身体つきもそこそこで、イカツイとは言わないまでもしつかりした筋肉が付いている。実際、サッカー部の期待のエース候補でもある。

そんな人物であるのに、何故か僕とこいつはウマが合う。幼馴染って事もあるのだろうが、たまに暑苦しいのがキズだ。

それはさておき、今は下校中で、シーズンが秋から冬にさしかかっている昨今、部活がない雄と僕は仲良く帰路についている。

「そりゃ、雄には分からないだろうさ。僕という人間がいかにかこの現実に不満や反感を持っているかなんて」

「そうだな、可愛い彼女持ちで年中バラ色の俺にはさっぱり分からない」

「コロスツ!!」

「うおっ!?! やめろ! キャラ物のボールペンを振り回すな! しかも二刀か!?!」

風を切って唸る僕の剣尖を雄は手首ごと押さえ、僕の正気を引き寄せてくれた。

「あ……、ああ、ありがとう雄。もう少しでこの美しい限定付録をお前の穢れた血で汚すところだったよ」

「俺の安否よりペンの安否か、さすがだなお前」



なにやら雄が不思議なことを言っている。妬ましい男の命と二度と手に入らない限定グッズ、天秤にかけたら後者に傾くのは人間が重力によって地球に立っているのと同じくらい当たり前では無いだろうか。まったく、たまによく解らないことを言うから困ったものだ。

「ところでその限定品とやら、初めて見るな。お前の懐から出たもので見たことが無いということは、新作か」

「うん、映画館の販売店から。映画化したからね、今年の初めに」

今年の初めの頃に、もう一つの大御所アニメとほぼ同じタイミングで上映された有名な魔法少女アニメのグッズだ。僕が好きなヒロインが二人、純白のスカートを靡かせる茶のセミロングの女の子と、金髪ツインテールの女の子、そしてその子達が愛用する、金のフレームに真紅の宝玉、金色のクリスタルを核とする漆黒の戦斧のミニチュアストラップが付いている。もう一方の映画はロングセラー原作の待望の映画化版だったのだが、もちろん僕は両方見に行った。

「全然新作でもねえじゃねえか。あ、思い出した。冬休みの終盤も差し迫ってきているというのに、おまけに後もう少しで受験というタイミングのクセに、無理して見に行ったアレか。それにしてもよく受かったなあ前」

「愛があればこそ、だよ。それにこの学校はレベル低かったからさ、実際は大して勉強しなくても受かったんだよねー」

「俺は家が近所だったからって理由で志望したんだっけか。お互い不真面目な理由だな、必死になってここ受けた奴もいるだろうに」

「優等生は辛いよね」

「お前の成績でその台詞がよく吐けるな」

そう、僕と雄は今春、高校生になったばかりだ。志望理由は前述

の通り、「楽をしたかったから」である。

実際こういった理由で高校受験する人っていうのも多いそうで、入学後に苦勞しなくても授業に付いて行けるように敢えてレベルを落とすのも一つのやり方らしい。卒業手前で苦勞すること間違い無しではあるが、それを解かっていながらそこを選んでしまうのが若さって奴である。

僕としては、まあ楽しかったのもあるんだけど、趣味と勉強の比率がなるべく前者に傾くようにしたかったからだ。僕が愛する二次元への求愛行動とは非常に金と時間がかかるジャンルで、小遣いの前借りやバイトで工面しないとならない時もある。ゆえに、将来は履歴書以外に何の役にも立たない勉強なんぞに時間を取られては駄目なのだ。あくまで『愛』を貫く、それが僕の生き様。進路指導の先生に正直に言ったらぶっ飛ばされた過去を持つ生き様だが、気にしては駄目だ。

そうこうしているうちに、僕はいつものバス停まで着いた。距離的に家が近い雄とはここで別れている。

「じゃな、コウ。まさかとは思うが、道に迷うなよ」

「百回は聞いたし、もういくらなんでも迷わないよ。寝過ごしてもしなければね」

「なら、寝過ごさないように注意することだ」

早速背を向けて軽く走り出した雄に苦笑しつつ手を振って、間もなく到着した路線バスに乗り込んだ。手近な席にちゃっちゃと座り、あまり質の良くない背もたれに身をうずめる。

暦は終盤へと至り、外気もすっかり寒くなったので、バス内は少し暑いくらいの暖房が焚かれている。

不規則に揺れる車内。暖房でボーっとしつつある頭。学校帰りで疲れている身体。

眠くなるのは実に自然な作用だった。

さつき注意されたばかりじゃなかよ、と内心で呆れつつも、この睡魔には勝てそうも無い。もともと僕は所有欲などの本能に従って生きているので、生理的な反応にはめっぼう弱いのだ。徹夜もよほど余裕が無ければ使えない。一夜漬けは得意なんだけど。

などと色々考えているうちに段々と目蓋が重くなってきた、思考も緩やかに減速していった、いつしか僕は、夢の中へと誘われていた。

不思議な夢を見た。

そもそも夢と言えるのかどうかも定かではない夢で、その内容が『虹色の輪が延々と広がっては消え、広がっては消えていく』というものだった。しゃらん、というような鈴音と共に波紋のように七色のサイケなリングが広がって、僕の視界から消えたと思っただらまた新しく音と輪が広がる。それが長々と続き、いったい何の催眠術だよと無意識下に思っていた。

やがて輪の広がり徐徐にスピードダウンしていった、僕の視界いっぱい大きさに固定されるようになった。その内部に、今度は四角形がぐるぐると回って二つほど展開され、さらにはその間にも輪が複数広がって。

そこで不意に、景色が途切れた。夢の始まりが唐突なら終わりも唐突だ。

突然身体がガタン、と揺れ、驚いて目を開くと、困ったような表情の男性が目の前にいた。白い手袋、硬質そうなイメージを受ける帽子、制服。運転手さんだ。

寝惚け眼で何事かと訊くと、

「えーとねお兄さん。もう終点だよ？」

とのことだった。

さらに驚愕しつつ外の風景を見ると、そこには見慣れた住宅街とぼつんと立つ停留所の目印。ではなく、まったく見知らぬ街だった。僕の住む街は少なくとも内地地で、こんな綺麗な海岸線がある街では決して無い。

僕はひとまず運転手さんに謝ってバスを降り、大丈夫かと親切に心配してくる運転手さんも丁寧に断って、とりあえずその地へと踏み出した。

潮の匂いが微かに漂う街。コンクリートの灰と自然の緑と海の蒼あおが程よく混ざっている海岸の街のようだ。いつも使っている路線のバスで行けるところにこんな場所あったかな、と思いつつももう少し歩いてみる。好奇心もさることながら、幸い日はまだ高く、もう二時間もすれば暗くなるだろうが、その時はその時だ。今の時代はケータイのGPSもあるから、道に迷って野宿なんていう悲惨な目には遭わずに済むだろう。

しかし、と、僕は今後をどうするかを計画を練り止め、改めて周囲を見渡した。

この風景には、僅かに既視感がある。

この海岸線といい、建造物といい、何かから何までつい最近に見た覚えがあるのだ。はて何だったかな、と記憶の糸を辿っても、デジヤヴ故に思い出しようもない。しかし、確かに見覚えがある。外にほとんど出ない僕が、外の風景に感じる既視感

「あ」

と、糸の端を掴んだような感覚がぼつと湧いた、

瞬間、

ゴズンッ！！ と結構強めな衝撃が、僕の左脇腹をとらえた。

「きゃあっ！？」

「ぐほおッ！？」

可愛い悲鳴と似つかわしくない衝撃に僕は奇妙な声を出しながら吹っ飛び、突進してきたその人物と同じくすっ転んだ。特に突っ込んで来たほうの荷物が派手にばら撒かれ、その内のA4ノートの一つが足元に転がってきた。

痛む脇腹としたたか打ちつけた後頭部に目をしかめながら、僕はひとまず心配の声を掛ける。

「つつつ……だ、大丈夫！？ あ、荷物が……」

「いたたあ……ふあ、はい、ごめんなさい！ 前見えてなくて……わ、わわ」

突撃犯はなんとも可愛らしい声で僕に謝罪を送り、慌てて辺りにぶちまけられた自分の荷物を拾い始めた。見渡してみると、あるのはペンケースにノートや教科書ばかりだ。恐らく小学生だろう。それにしてもこんな綺麗な声を持っているとは、様々な声優ファンでもある身としては未恐ろしい娘だなと勝手に思ってみたり。

痛みも忘れた些末まな感動もひとしお、僕はすぐにその手伝いに取り掛かった。と、その子が遠慮がちに言ってくる。

「あ、いいですよ、これは私が……」  
「いや、いいよ。大丈夫だから」

その声を制止するように上つかぶせつつ、僕は手近な教科書とノートを片っ端から拾った。対応する学年の枠を見ると、どうやら小学三年生らしい。ロリコン涙目いや歓喜だな、と感じつつ、その子に荷を渡していく。二人でやると早いもので、土埃ちほこを払ったりなんかしたタイムラグを含めても一分はかからなかった。

「はい、どうぞ。今度からは気をつけるようにね」

「は、はい。本当に、すみませんでした……」

年上らしく気取ったようなセリフに、消え入りそうな声で謝ってくる少女。可愛いなあと思いつつ、ふと目線を手元にやった。

本当に、何の事はない拍子で。

『国語

3年\*組 高町なのは』

ガン、と脳天を強烈な一撃に当てられたような衝撃が身体中を奔った。

高町なのは。

間違いなく、そんな字が、実に可愛らしい字体で書かれていた。バツ、と顔を上げて、思えばよく見ていなかった少女の顔を見る。くるくると大きな双眸。整った顔立ち。栗色味がかった髪を頭の両サイド、白いリボンで縛っている短めなツインテール。制服は純白、胸元に怪獣の足跡のようなマーク付き。

……何が既視感だ。それどころか、僕はこの世界を何度も見ているじゃないか。

デジャヴなんてものじゃない。これは、紛れもなく

「……あ、あの、何か……？」

「はっ！ あ、いや、ごめん！ 何でもない！」

頭の中がぐるぐると渦巻いている僕を怪訝に思ったか、少女は不思議そうに訊きいてくる。一気に意識を引き戻された僕は必死にジエスチャー付きで弁明するも、しまったこれじゃかえって不自然だと感じつつ、僕は仮にも数年先輩の者として、咳払いをして調子を整え、彼女を促す。

「さ、さあもうお帰り。こっちは別に気にしなくていいから、うん」

「は、はあ……それじゃ、その、失礼します。あの、本当にすみませんでした！」

気にしないで、と声をかける隙もなく、少女は勢いよく一礼してから一目散に駆けて行った。そんなに僕の顔が、というか存在が気味悪かったのだろうか、その走力は脱兎たうとの如ごとくである。

「……まあ、いきなり見ず知らずの人にぶつかっちゃって、おまけに散らばった荷物の片付けとか手伝われたら、気まづくもなるか」

少なくとも僕ならば家に帰ってからしばらく悶絶するだろうが、しかし今はそんな事を気にしている場合じゃない。立ち上がり、僕は周りを見渡しつつ歩き始める。主に上に視線を向け、必死にアレを探す。国道沿いの道になれば必ず設置されているはずのアレを。

やがて、道路の端に立っている電柱の上に、それを見つけた。青い下地に、シンプルな白い矢印が組み合わさった看板 道路標識

である。自動車の運転席から少し視線を上にとやると、簡単な道案内をしてくれる地図だ。

そこには、こう書かれてあった。

「……………これより100メートル先……………つみなりし海鳴市……………」

思わず音読してしまったのは、あまりの驚愕に脳が何の自制もか  
けなかったからである。

海鳴市。僕が知る、この世のどこを探っても絶対に実在しないと  
踏んでいた、架空のはずの街。

高町なのはという名の少女、海鳴市という名の街。僕の渴望かつぼうの先  
にある目的地を指すキーワードが二つ。そしてそこから広がって  
いく、僕の知っている世界。

素直な疑問が、浮かぶ。

「……………ここは……………どこなんだ……………?」



……果たしてこれが、一体何を意味するのか、また僕にとってどのような意味があるのかは、今でも解からない。

ただ、僕は空を見上げ、呆然と立ち尽くすしかなかったんだ。

思考はすっかりショートしていた。

手から鞆かぼんが音を立てて落ち、今度は僕の荷物がぶちまけられた。

## やじいじいとなの(前書き)

皆様おはようございます。

さて今回は、作者個人的には珍しい処置として、一話ぶんを短め(当社比)に小分けして出していると思うております。イメージとしては、アレだ、DVDのチャプターみたいな感じ。サブタイトルで話の展開が大体どこらへんのかを解かりやすくしてみようかなど。逆効果だったら土下座します。

我慢出来ずにフライングしてしまったで御座るの巻

ではまたね。

## やじいじいとなの

さて皆さん、あなたがもし『自分か心の底から願っていたことが叶った瞬間』に立ち会ったら、あなたはどつするだろうか？

例えば、好きな音楽グループにバッタリ会えたときとか、好きな作家のサイン会が偶然近所でやってたときとか、念願のライブのチケットが取れたときとか、片思いをし続けてきた相手に告白されたときとか。言わば『心の底から望んでいて、でも高確率で叶わないだろう理想』だ。

ちなみに、二次元をこよなく愛して止まない人種の僕の場合は『好きなアニメや漫画の世界に行くこと』となり（一部の人間の間ではこの行為を？幻想入り？と呼ぶ）、リアクションとして『奇声を上げて後々絶対恥あこめずかしくなるだろうテンションで暴れること』となる。かなり特異で自分でもおかしいと思える反応だが、実際にこういった反応に及んだ経験が少なからずあるので払拭しきれなかったりする。いや、少し、少しですよ？ そんな頻繁にやってるわけじゃないんですよ？

それはさておき、僕は現在、この質問と全く同じシチュエーションを体感している。

すなわち、『最近のお気に入りのアニメの世界に見事ダイブ成功』

既視感バリバリの風景の街に立ち、その世界ではメインヒロインの座に君臨する少女と何のフラグかぶつかった。

これを夢の体験と言わずして何と言おうか。本来であれば、僕はこの状況において「ヒヤッホオオオオウ！ 地球に生まれてよか

った　　ッ！！」とか、「お父さんお母さん！　僕を産んでくれて  
ありがとう！　今人生で一番嬉しいですッ！」とか、過去の自分  
であれば間違いなくそうシャウトしていたのだろうが、  
今も以つて、全くその気にはなれなかった。

状況を整理しよう。そして検討するべきだ。何故夢にまで見た状  
況に置かれてなお、僕が発狂せずに済んでいるのか。

まず仮定として、僕が本来居たはずの《世界》と、僕が現在居座  
っているこの《世界》を、前者を《あの世界》、後者を《この世界  
》と呼ぶことにしよう。その上でとりあえず考えを整えてみる。

さしあたってとりあえず、色々とおかしいことを列挙すると、ま  
ず第一に、僕は何の因果か最近見たアニメの舞台である『海鳴市うみなりし』  
に迷い込んでいる。道路標識で確認済みなのでこれは間違いはない。

次に、何の冗談か携帯がまったく機能しない。インターネットブ  
ラウザやフォルダなどを開くことは出来るが、通話やメール、果て  
は地図確認までもが不可能になっている。外部との通信手段が全て  
使えなくなっているのだ。これでは迷子癖のある僕はおうちに帰る  
ことすらやむを得ずかではない。

最後に、フラグイベントに似たような何か。

僕はつい先程、《あの世界》ではメインヒロインの一人であり、  
圧倒的な数のファンを有し、内に秘めたる強大な力から一部の信者  
に『白い魔王』とまで呼ばれる少女・高町たかまちなのはと出会った。さら  
に一体どんなお約束か、彼女は軽トラ並の突進力でもって僕の脇腹  
に頭突きしてきた。これがもし朝の通学路で年齢の差も大して無け

れば間違いなく恋愛ルート一直線だ。勢いが軽トラ並みであるあたりに彼女には違った意味での将来性を感じるが、ああでもあの『彼女』と付き合えてウフフーなことになれるんだったらもうロリコンでもいいかもなあ。未だに痛むこの脇腹に僅かな幸福感が混じっていると自覚している辺り片鱗は垣間見えているとか、ええい埒が明かん。

ともかくだ。

以上、この三点が、現在の僕に降りかかっている不可思議イベントの全容だ。客観的に物申させてもらえば「これなんてギャルゲー？」と全身全霊をもってツツコみたい。というか少し前にホントに言った。周りに人がいないのの良いことに高らかに叫んださ。何か問題でも？ だってそうでもしないと僕間違いないぶっ壊れちゃうよマジで。もう壊れてるのかもしれないけど。

だって、こんなの。

現実的じゃ無さすぎるだろう？

信じるという方が無理だ。バスで居眠りしてたらうつかり見知らぬ終点へと至ってしまい、その先がフィクションであるアニメの世界？ ふざけるな、一体どういうドッキリだ。隠しカメラはここか。プラカードを持ったスタッフはどこにいる。頼むから出てきてくれ。と、言いたいのは山々なものの、実際これが現実（らしい、という域を出ないが）なのだから、文句を言っても仕方がないと、そういうことなのだろうか。

はあ、と、重苦しい溜息が嫌でも洩れる。

ところで、僕は現在、『海鳴臨海公園』にある休憩所のような屋根つきの小さなベンチに佇んでいる。時刻は既に夕方、真っ赤に燃える日の入りがなんとも美しい。今は解からないことばかりだけどちょっと歌いたい。別に誓いは立てないけど。

緑の芝生を目尻に、正面から夕日を見つつ、考える。

（これから、どうするべきなんだろう）

外部との通信手段が使えない　これは恐らく、何者かの電磁パ  
ル的な何かが妨害しているのだろう。通話や電子メールはそもそ  
も機能せず、ブラウザを立ち上げてのインターネットには接続でき  
るけど、よく利用していた掲示板などのコミュニティを使えないの  
がその証拠だ。そして情報を与えないということは、出入りも不可  
能になっているはずだ。道しるべを与えないくせに、のこのこ歸ら  
せるミスを犯すなんて馬鹿はいない。

ちなみにこれは僕が長年アニメや漫画を見てきたことによつて培  
われたある種の予想能力で、これによつて数々のギャルゲーの分岐  
を乗り越え、見事ハッピーエンドまで導かせた。たまにバッドエン  
ドもちゃんと攻略するが、大概の場合は『ここで何を選べばどうな  
るか』で乗り切った結果、ほとんどの場合良い方向に事が進む。お  
手軽な現実逃避にも使える。鍛えればたぶん競馬とかにも使える。  
経験値つてどこで重要になるか分からない。

別名？厨二病？とも呼ばれている立派な社会問題だがそれもさて  
おき、ならばどうするべきかと考える。

恐らく僕は何者かの手によつてこの街に誘われた。考えられる常  
套ルートとしてはそれが一番有力だ。そこに一体どんな目的と意味  
があるのかは不明だが、しかしこのまま黙っていてもここで凍死し  
て野垂れ死ぬだけだ。あのアニメの二期の終盤ではこの地域にも立  
派に雪が降っていたし、海沿いだけあってこの辺りは相当に冷え  
るだろう。その証拠に、海から吹き込んでくる秋の潮風がこんな  
も冷たく。

.....秋？

そこでふと浮かんだ違和感に疑問が湧き、改めて自分の感覚と照  
らし合わせてみる。

確かに、肌寒くはある。しかしそれは夏から冬へと移り変わると  
きの感覚ではなく、むしろ真逆の　冬から夏へ、段々と暖かくな  
ってくる、肌が微かに楽しみを訴えてくるような　。

慌てて、左手首に巻きつけた電波時計を見る。携帯にも時刻機能は搭載されているが、僕には何故か同じ機能を持つものを二つ以上持ち歩く習性がある。デジタルとアナログを使い分けるためだ。時計もデジタルだけだ。

時刻はまだいいだろう。四時三十七分。問題は現在の日付だ。

「……………どういうことだ……………?」

今日何回目かの驚き。

なんと、四月二十六日らしい。バリバリの春だ。ピッカピッカの一年生が誕生する時期である。

恐らく最寄りの電波塔からの情報をキャッチして表示しているのだろうが、それと合わせて、また仄かに違和感が湧いた。

……………四月の末……………脇目も振らず走ってきた少女……………まさか。

そう、僕の感覚と予想が正しければ。

今晚辺りに、この地で彼女と彼が出会い、『物語』が始まる。

「……………!」

そうだ、僕の記憶が正しければ　いずこかの山奥に結界が発生し、一人の少年が瀕死の重傷を負う。その翌日、通りがかった一人の少女が彼を見つけ、病院へと連れて行く。その日の晩、少女は不可思議な目に遭い　その後の人生の分岐点に至る。今年の初めに見た劇場版と地上波版アニメ、そのままのシチュエーションだ。

コミックスも買った僕の熱烈なる記憶に齟齬そごは恐らく無い。

「……………これは……………」

神の悪戯いたづらか、はたまた悪魔の罠か？

僕はある意味で、過去の歴史の最中にいるということになる。

では、僕が今置かれていた状況はタイムスリップとか、そういった類の現象なのだろうか？

僕は今、過去ににいるのか？ それとも似て非なる、パラレルワールドの更なるパラレルワールドなのか？

疑問は次々と湧いてくる。しかし、

「……………だけど……………」

だからと言って、僕に一体何が出来ようか。

平々凡々たる一般人である僕には、当然の事ながら魔力もSFパワームも持っていない。運良く(?)現場に居合わせたとしても、僕がいたら邪魔になるだけだ。そもそも今晚の宿すら決まっていない身分である。何の力も無い高校生に一体何が出来ようか。

しかし、このまま何もせず、ただ茫洋ぼうようと時間を食い潰すのは、僕の性根にそぐわない。というか、落ち着かない。

ならば、と僕は一番最初の疑問に戻る。これからどうするべきかと。

「……………よし、ちょっとお茶してアタマ冷やそう」

こんな状況でもしつかりと元ネタを引っ張ってこれる自分に感嘆しつつ、僕は重い腰を上げて、当てにならない記憶を頼りに歩き始めた。

目的地は もちろん、僕の同志であるならば、そして現地であ



るならば、何を置いても必ず一度は行きたい喫茶店である。

そういう下心を芽生えさせられるような余裕は、とてもじゃないが無かったけれど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0738z/>

---

Lyrical world ~海のさざめく街に迷う~

2011年12月5日19時57分発行